

LINE 公式アカウント始動!

友達募集中

LINE @240jojrj

上記IDにて検索もしくは
右記QRより友達追加!

Instagram

大阪南医療センターの日常をご紹介します!
ぜひフォローしてください!

osakaminami_iryō

診療科 **NOW** 泌尿器科



左：永井 康晴 中央：上島 成也 右：花井 禎

TOPICS

新任医師のご挨拶

産婦人科 おおた ひろし 太田 裕

この度、大阪府済生会茨木病院より赴任致しました太田裕と申します。昨年までは産婦人科専攻医として3年間、診療に従事していました。産婦人科専門医を取得したため、いちスタッフとして診療に従事し、さらに産婦人科医として知識・技量ともに深めていければと思っています。南河内の医療に少しでも貢献できるよう努めて参りますので、今後ともよろしくお願い致します。



第14回 南河内二次医療圏緩和ケア研修会のご案内について

厚生労働省による「がん診療に携わる医師に対する緩和ケア研修会の開催指針」に基づきまして、今年度も地域の先生方を対象に、標記研修会を開催する運びとなりましたのでご案内いたします。

日時：2022年9月10日(土) 場所：大阪南医療センター

当院ホームページにて詳細を掲示しておりますので、参加申し込みされる方はご確認くださいませよう、よろしくお願い申し上げます。



ホームページはこちら

広報誌「南窓」のご意見・ご感想をお聞かせください

広報誌「南窓」をお読みいただき、誠にありがとうございます。

お客様一人ひとりの声をより良い広報誌作りに活かしてゆきたいと考え、ご意見・ご感想を募集しております。

皆様からのご意見は、今後の改善を進める上で参考にさせていただきます。上記のURL または QRコードよりフォームにアクセスが可能です。

※ご意見・ご感想への返信はいたしておりません。ご了承ください。ご意見全てにはお答え出来ない場合がございます。予めご了承ください。

ご意見・ご感想はこちら ▶ <https://contact.osakaminamihosp.jp/>



大阪南医療センター 循環器疾患センター 24時間緊急対応 (ハートコール) 胸背部痛、呼吸困難、動悸等 循環器疾患が疑われる際には緊急対応連絡先へご連絡ください。直通 Tel. 0721-53-3200



特別女性泌尿器科外来も設置

地域の先生方との**連携**のもと
全人的な**治療**を目指し続ける



「泌尿器科の動画はこちら」

泌尿器科部長 はない ただし 花井 禎 緩和ケアセンター部長 うえじま しげや 上島 成也 泌尿器科医師 ながい やすはる 永井 康晴

患者数の多い「前立腺がん」連携して**早期発見**に努めましょう

上島 泌尿器科ではすべての適応疾患に対して、患者・家族さんのQOLを重視した全人的治療をモットーとしています。

それら多くの疾患のなかで、本邦の男性がん予測罹患数で最も多い「前立腺がん」についてお話しさせていただきたいと思えます。前立腺がんは年齢が高くなればなるほど罹患率が増加します。高齢化の顕著な南河内エリアでは地域をあげて早期発見、治療につなげていく必要があるでしょう。早期発見すれば開腹手術、ロボット支援手術などの外科的治療や、前立腺に集中的に照射する強度変調放射線治療(IMRT)などの放射線治療で根治を目指すことができます。

そのためにもやはり最重要なのは検診です。主な検査は「PSA

検査」で、PSA値に異常があれば、前立腺生検で確定診断する流れですが、懸念しているのは、PSA検査が、近隣では河南町以外では検診に導入されていない事です。検診に早くからPSAを導入している二次医療圏では、がんの疑いがあれば比較的早く泌尿器科受診となっておりますが、南河内二次医療圏では、進行がんとして診断されることが少なくないことを心配しています。

在宅診療の先生方には、前立腺がんが気になる患者さん、たとえば家族歴に前立腺がんがある場合などは当科へご紹介いただき、ぜひ連携の上、前立腺がんの早期発見につなげていければと願っています。そしてできれば、住民健診の60歳以上男性のPSA検査を早急に加えていただくことを望みます。



女性特有の「骨盤臓器脱」**女性医師の日**も設けています

花井 比較的高齢の女性で増えているのは「骨盤臓器脱」という疾患です。膀胱、子宮、直腸などの骨盤内臓器が、骨盤底筋群の支持力低下などにより脱出してしまう疾患で、複数の臓器が脱出することが多く、当院では産婦人科や外科との連携によって、それぞれ保存治療、経膈メッシュ手術や腹腔鏡下メッシュ手術など、個々の患者さんの状態に合わせた治療法を選択します。治療に関して地域の産婦人科からの紹介も多くあります。

一般に、何かが下がっていると感じたり、股間に当たる、排尿障害など違和感の出た場合、まずは泌尿器科や産婦人科

で診ることになりますが、どうしても恥ずかしいという思いから、しばらく放置されてしまう患者さんがいらっしゃるのも事実です。そこで当科では、月曜日午後、女性泌尿器科を専門とする女性医師による「特別女性泌尿器科外来」を設置。そうした女性泌尿器科の先生方でネットワークも作っておられます。

ぜひ第一歩の窓口として受診をしていただければと思います。また金曜日午前も女性の先生が非常勤で来ていただいておりますので、この機会にお知らせさせていただきます。

「**尿路結石**」に対する**手術**は当科の**強み**のひとつ

永井 患者さん数の増えている尿路結石においては、「ビデオスコープ細径軟性尿管鏡とレーザー」をいち早く導入しました。この手術法は、内視鏡を挿入し、モニターで結石を確認しながらレーザーで砕破、破片まで回収することで治療成績に大変優れています。また、全身麻酔の難しい方や碎石困難な硬い尿路結石に関しては体外衝撃波により碎石するなど、その方に応じた適切な手術法で安全と安心を確保しています。

さらに当科の強みのひとつは、「腎臓結石」に対する「経尿道的碎石術と経皮的碎石術の併用手術」です。腎臓結石は腎盂と腎杯に連続する大きな結石で単独の療法では碎石の困難なことが多く、当科では腎臓側と尿道側の両方から内視鏡により石を砕破し、摘出。碎石効率が非常に良いです。当科は導入時期も早く症例数も豊かですので、ぜひご相談ください。



腎臓開放手術（碎石手術写真ではありません）



碎石前結石 碎石開始 碎石終了 抽石中



ICT・ASTのメンバー 前列左から、山本 よしこ・峰岸 三恵・藤原 佐美・新田 亮

それぞれの専門知識と実践力をフルに活用！
医療関連感染を起こさない、拡げない

「感染対策室の動画はこちら」



感染対策室長／感染制御医
やまもと

山本 よしこ

感染管理認定看護師
みねぎし みえ

峰岸 三恵

感染制御認定薬剤師
にった りょう

新田 亮

感染制御認定臨床微生物検査技師
ふじはら さみ

藤原 佐美

地域を守るのも重要な使命

山本 感染対策室は私たち4名をコアメンバーとして、リンクスタッフや各部・各科と連携し、感染制御チーム（ICT）、抗菌薬適正使用支援チーム（AST）の2チームで感染対策に取り組んでいます。私自身は、細菌培養検査結果に基づいて抗菌薬が適切に使用されているかどうかを確認し、患者さんに最適な治療を提供するための検討を日々重ねています。また当室にとって地域を支えるのも重要な使命であり、「南河内感染対策ネットワーク」に参加しています。30施設ほどが抗菌薬の使い方や耐性菌検出状況等について情報を共有し、治療に反映したり、耐性菌の感染拡大防止の相談にのったりしています。また、感染対策に対する研修会も実施しています。保健所とも協力してネットワークに参加していない施設への講習やクラスターを起こしてしまった施設への指導も担当しています。今後でもできることはすべてやるという実践力を持って協働体制の推進を図り、院内並びに地域の感染対策の質を上げることに尽力したいと考えています。

新田 薬を通して、院内の感染症診療をサポートしています。一例では、抗菌薬は使い過ぎると薬の効かない「薬剤耐性菌」を生み出してしまうことが近年世界的に問題となっています。これは、患者さんが使用できる抗菌薬を減らしてしまう結果につながってしまいます。薬剤師は、医療者が抗菌薬を適正に使用していけるように、「必要なときに必要な量で治療をする」ため日々処方支援や相談応需を行っています。

藤原 検査を駆使し、感染症の原因菌を推定するとともに、原因菌に対して効果のある抗菌薬を特定することで、いち早く有効な治療へと結びつけます。また、抗菌薬の効果判定や院内の薬剤耐性菌の発生状況を把握し、ICT・ASTと情報を共有することで、個々の患者さんの安全で適切な治療のために尽力しています。

峰岸 たとえば耐性菌や感染症が発覚した際、適切な対策が行われているかを確認し、職員へ助言を行います。特に重要なのは、マニュアルやガイドラインにのらないような問題が生じた時やそのケース特有の問題が生じた時の対応です。状況によりベストな選択（対応）をすることができないこともありますが、現場の職員と話し合い、患者さんと職員を感染から守るために「この現場でのベター」を共に考え「全員が確実に実施できる対策」を責任を持って提案したいと考えています。

実は当院ではコロナ以前より、感染を「起こさない、拡げない、もらわない」という感染予防の観点から「症状があれば休む」ことを推奨し、体調不良時に休みやすい環境（報告しやすい環境）を準備していましたが、感染早期での対応がしやすくなっており、職員間での感染伝播やクラスターを起こすことなく、地域の中核病院である当院の使命を果たすために診療を止めないということを実行することができています。こうした職員同士の支え合いや患者さんにも協力していただける環境が当院の感染対策の要であると思います。